

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月18日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530520

研究課題名（和文） 文化社会学の可能性——ソローキンをめぐる——

研究課題名（英文） The Possibility of a Cultural Sociology: Around Sorokin

研究代表者

大野道邦 (OHNO MICHIKUNI)

京都橋大学・総合研究センター・研究員

研究者番号：20067862

研究成果の概要（和文）：ソローキンの文化社会学の成立過程を、出自であるコミ族の文化、ロシア革命、ハーヴァードにおけるパーソンズやマートンとの人間関係、アメリカ社会学界における位置などと関係させて知識社会的に明らかにし、また、パーソンズおよびデュルケームの文化社会的所説と比較しその理論的な意味合いを検討した。その結果、ソローキンは、社会や経済や政治からの「文化的な自律性」と外在的な環境に左右されない「文化の内在的な変動」を強調する「文化〔的〕社会学」を提示し、これに価値や規範に深くかかわる「預言（者）的 sociology」の特徴を与えたことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：This research attempted to analyse the formation process of Sorokin's cultural sociology in relation to the Komi culture in Russia, Russian Revolution, his ambiguous relations with Parsons and Merton in Harvard, and his unique position in the American Sociological world from sociology of knowledge perspective. And it examined his theoretical significance by comparing Sorokin's idea with cultural sociological ideas of Parsons and Durkheim. As a result it was pointed out that Sorokin presented a "Cultural Sociology" emphasizing "cultural autonomy" and "immanent cultural change," and gave it a prophetic sociology aspect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、文化社会学、ソローキン、パーソンズ、デュルケーム

1. 研究開始当初の背景

ソローキンの「文化社会学」の特性は、簡単にいうならば、文化の「内面的」な側面である「文化心性 (Culture Mentality)」が

システムとしては「内在的な自己規制と自己＝指向」の原理によって、「観念的 (Ideational)」文化心性から「理想的 (Idealistic)」なそれを経て「感覚的

(Sensate)」な文化心性へと自律的に変化するという仮定に立つ (Cf. Sorokin, *Social and Cultural Dynamics*, [1937] 1962, vol. I: 51)。すなわち、文化システムは自律性を保持しているであり、このシステムは他の物理的システムや有機体的なシステムなどの「因果的あるいは機能的統合」とは異なり、「論理＝意味的な統合」を成している。前者の統合が一要素まで分析可能な構成部分の相互依存関係によって構成されるような統合であるならば、後者の統合は特定の観念や意味によって秩序化されるような統合であり、文化現象においては後者の統合が重要となる。このような文化システムが自律的に展開することによって、さまざまな知識や芸術や道徳、社会関係や集団構成、パーソナリティから成る社会文化的な世界を内的・意味的に規定するのである。すなわち、多様かつ断片的な社会文化的な現象はこの文化システムによって「秩序」を与えられる。このように、ソローキンの文化社会学は、文化現象を権力や階級・集団・組織やイデオロギー・社会心理状況などの社会的要因の単なる従属変数に位置づける従来の「文化についての社会学 (Sociology of cultures)」ではなく、強い意味での文化社会学、すなわち、文化に社会文化的な現象を能動的に構成する力を認め文化を自律的な説明要因として強調する「文化〔的〕社会学 (Cultural Sociology)」への方向を示している (Cf. Alexander, J. C., *The Meanings of Social Life: A Cultural Sociology*, 2003)。

本研究に関連する過去の研究業績についていえば、国内においては、以前にはソローキン社会学の概要、船津 衛「ソローキン」『現代社会学のエッセンス』(1972)、近年ではソローキンの生涯と関連させた議論、藤田 弘夫「ある社会学者の闘い——P・A・ソロ

キンの数奇な生涯」『法学研究』(慶應義塾大学法学研究会) (2004)、最近では、ソローキン社会学の「統合主義」に焦点をあてた業績、吉野浩司『意識と存在の社会学——P. A. ソローキンの統合主義の思想』(2009) などがある。さらに、短いものであるが的確な指摘、丸山真男「ソローキン『音楽社会学』訳者まえがき」『丸山真男集第一巻』([1940] 1996) もある。国外においては、ソローキンの文化論を、「存在要因」を強調するマンハイムの *Wissenssoziologie* と異なったタイプの、文化要因を強調する知識社会学であるとした、J. J. Maquet, *Sociologie de la connaissance* ([1949] 1969)、ソローキンの文化社会学を、“Downwards Conflation (下向的融解)” タイプの文化社会学であるとみなした、M. S. Archer, *Culture and Agency* ([1988] 1996) の業績がある。「下向的融解」とは、「文化システム統合」が、編成化・規制化・内面化のプロセスを通して、「社会＝文化的統合」を飲み込んでしまうこと、いいかえれば、文化システムのもつ「論理性」に文化＝社会的統合あるいは相互作用の「因果性」が解消されてしまい、文化＝社会的統合が文化システム統合の付帯現象となってしまうことである。また、ソローキンの生涯における知的展開を総合的にあつかった、B. V. Johnston, *Pitirim A. Sorokin: an intellectual biography* (1995)、さらに、忘れられた社会学者、ソローキンの豊かな社会学的遺産を語ろうとする、V. Jeffries, “Integralism: The Promising Legacy of Pitirim A. Sorokin”, M. A. Romano ed., *Lost Sociologists Rediscovered* (2002) などの業績がある。なお、ロシア語の業績では、ソローキン生誕110年記念国際シンポジウムの論文集、*Материалы Международного научного симпозиума, посвященного*

110-летию со дня рождения Пилирима Александровича Сорокина, под ред. Ю.В. Яковца, М.: Московский общественный научный фонд (2000) がある。

この研究動向のなか、報告者たち（研究代表者、研究協力者）は、一方において、赤穂事件をめぐる記憶と文化、日本の美意識と名誉に関して、具体的な文化社会学的な分析を実施し（『記憶と文化——「赤穂事件」記憶への文化社会学的アプローチ——』（科研成果報告書、2003）、『日本の美意識と名誉概念——ノブレス・オブリージュの文化社会学——』（科研成果報告書、2007）、「歌舞伎——その諸相と構造」、「ユースカルチャーファーストフード——ロシアの文化事情」（『文化の社会学——記憶・メディア・身体』2009））、他方において、文化社会学の理論的な問題を検討してきた（「文化社会学をめぐる問題」『人間文化研究科年報』（奈良女子大学大学院、2001）、「社会学のゆらぎまたは再生——ディシプリンとスタディーズの間で——」（『奈良女子大学社会学論集』、2006）。そして、関西の若手研究者と文化社会学に関する研究会を組織し活動する過程で、弱い意味での文化社会学、すなわち、文化を究極的には社会的なものの従属変数とみなす従来の文化社会学と「強い意味での文化社会学」、すなわち、文化をシンボル・意味のシステムとして捉えそれが社会文化現象を根源的に構成する自律的な要因であるとする文化社会学の区別に留意し、とくに、後者の、シンボル性と自律性を特徴とするタイプの強い意味での文化社会学に注目するようになった（「イントロダクション——文化の社会学のパラダイム」、大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学——記憶・メディア・身体』文理閣、2009）。また、「強い意味での文化社会学」の視点から、社会文化現象の、理論的、

経験的な分析・説明をこころみた（大野道邦『可能性としての文化社会学——カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社、2011）。

「文化心性」を独立変数として捉え、この心性が「社会文化関係のあらゆる領域」に独自の「形態」を与え「人々の行動や行為」を「条件」づけると説く、ソローキンの文化社会学は、まさに、文化が前景化している現在、強い意味の文化社会学の先達をなすものであり、ここに、ソローキンを再検討する必然性が由来する。

本研究は、ソローキンの文化社会学について、ロシアにおけるソローキンの社会学的活動の一端や革命とのかかわり、アメリカ亡命後における文化社会学の理論的洗練活動やアメリカ社会学界におけるかれの地位を検討しながら、文化社会学の理論的な特性と経験的な特徴について主として文献に拠りながら明らかにする。

本研究は、第一に、現在のカルチュラル・ターンの動向のなかで文化ないし文化的説明が前景化する状況にあって、ソローキンの文化社会学がとりわけ理論的にアクチュアリティをもっていることを示そうとすることであり、第二に、社会学史上、パーソンズや機能主義の巨大な影響力のもと、周辺部に置かれてきた、ソローキンの文化論的、統合主義的な社会学に再び光を与えようとするところみである。これらの点において本研究の特色、独創性がある。また、本研究の結果は、文化社会学の理論的精製に幾分かは貢献すると考えられ、文化社会学の領域や社会学説史の分野において一定の理論的、学説的な意義をもつことができよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロシア出身でソビエト政府から追放されアメリカに亡命し、ハーヴァ

ード大学教授を勤め、パーソンズ台頭までアメリカ社会学を一時期リードした、ピティリム・ソローキン (Pitirim Alexandrovich SOROKIN, 1889-1968) の社会学、とくに文化社会学に焦点をあて、カルチュラル・ターン (文化への転回) といわれ「文化」が前景化している今日の状況のなかで、実証的・量的・分析的・非政治的なアメリカ社会学の傾向、問題告発的・非ディシプリンの・政治的なカルチュラル・スタディーズの動向から一線を画した「文化社会学 (Cultural Sociology)」の一端がソローキンの文化論ないし文化社会学のなかに見出すことができないか、について検討する。

3. 研究の方法

2010年度は、外国調査旅行 (ロシア連邦コミ共和国シクティブカル、シクティブカル大学の「ピティリム・ソローキン研究センター」) による資料・文献調査・収集および聞き取り調査、2011年度は、外国調査旅行 (カナダ サスカトーン、サスカチュワン大学図書館「ピティリム・A・ソローキン・コレクション」) による資料・文献調査・収集および聞き取り調査、2012年度は、資料・文献の解説・解釈によりソローキン文化社会学の理論的な特性を抽出し調査結果を纏めた。研究協力者としてロシア出身の研究者であり現在、帝京大学助教の、日本文化論やロシア若者文化論の研究をこころみているコルネーエヴァ・スヴェトラナ (Korneeva, Svetlana) の協力をロシア語文献などの翻訳や解説、通訳において得た。また、本研究協力者は英語、フランス語も堪能なので、カナダ調査旅行においても協力を得た。

4. 研究成果

この研究の結果得られた知見を以下に掲げる。

- (1) ソローキンの文化社会学の形成の根源には、コミ文化 (とくにロシア正教と異教との混合) の影響があった。文化の自律性、とくに、文化的なものの経済へ

の非還元性の確信はここに由来するだろう。また、文化のマクロレベルの変動への関心は、エスニシティ的な立場のエトランジェ性や革命へのアンガジュマンと深くかかわっているだろう。

- (2) ソローキンの文化社会学は、基本的には、「文化心性」(心意・価値・意味の内的世界) の自己展開を前提としている。それは、「有意味的、規範的、価値担架的、超有機的」なりアリティ界を対象とする総合化・統合化的な社会学であり、「観念論的有機体説」(マーチンデール) とも呼ぶことができ、また、文化論的あるいは観念論的知識社会学 (マケー、マートン) でもある。

- (3) ソローキンの「文化社会学」の特性は次のようなものである。①「文化心性」がシステムとしては、「内在的な自己規制と自己=指向」の原理によって自律的に変化するという仮定に立つ、②文化心性は、動態的には、観念的→理想的→感覚的と展開する。同時に、これら三心性は各段階ごとにその優越性は異なるが構造的には共存する。文化心性は、他の下位的な文化システムにとって構造的に「上位=超越」であり、動態的には「上位リズム」で内在的に展開する。③文化心性あるいは文化システム概念は、それ特有の「自律性」を前提としている。ここに、ソローキン文化社会学の独自性、すなわち、文化は「付帯現象」ではなく、文化=社会現象を能動的かつ根源的に構成しそれを説明しうる「説明項」であるという「強い意味での文化の社会学、あるいは、文化〔的〕社会学 (Cultural Sociology)」的な特性が見られる。

- (4) ソローキンの文化社会学は、新しい可能性をもつ文化社会学の重要な一つの

理論的構成要素である「文化の自律的・内在的変動」を提供するであろう。

- (5) ソローキンの文化社会学は、意味や価値や規範などの文化的なものを預言的に強調する。なるほど科学としての価値中立性、ディシプリンとしての普遍性を保持するためには、預言者的社会学は警戒すべきである。だが、ディシプリンとしての社会学の社会的・文化的な意味を反省するとき、ソローキンの価値コミットメントの社会学的な意義を吟味することも必要である。

以上のような知見を、さらに一層彫琢して、新しい文化社会学の理論的な構築と経験的な検証を進めなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 大野道邦、ソローキン、パーソンズ、そしてデュルケーム——文化社会学の諸相——、京都橘大学大学院文化政策学研究科研究論集、査読有、第7号、2013、17-33
- ② Ohno, Michikuni, Sorokin Revisited: The Fate of Grand Theory or the Possibility of Cultural Sociology, *Memoirs of Kyoto Tachibana University*, 査読有, 39, 2013, 1-18
- ③ 大野道邦、コルネーエヴァ・スヴェトラーナ、ソローキン文化社会学の知識社会学的考察——コミ、革命、ハーヴァード——、京都橘大学大学院文化政策学研究科研究論集、査読有、第6号、2012、1-18

- ④ 大野道邦、ソローキンとパーソンズ——「文化システム」概念をめぐる——、京都橘大学研究紀要、査読有、第38号、2012、125-143

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 道邦 (OHNO MICHIKUNI)
京都橘大学・総合研究センター・研究員
研究者番号：20067862

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：